

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年5月20日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01145

研究課題名(和文) 高齢者の長期記憶に基づく異世代間交流の場としての博物館の基盤形成に関する研究

研究課題名(英文) Research on the significance of intergenerational exchange for senior citizens in museums through the survey on their long-term memories of museum experiences

研究代表者

湯浅 万紀子 (Yuasa, Makiko)

北海道大学・総合博物館・教授

研究者番号：60182664

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、明石市立天文科学館の「シルバー天文大学」(高齢者向け天文サークル)と昭和日常博物館(北名古屋市)の「いきいき隊」(地域回想法に基づく活動グループ)に注目し、博物館体験の長期記憶に関する研究調査を実施した。その結果、いずれの場合も、博物館体験における社会文化的な要素の重要性が示された。前者では世代を超えた参加者相互および科学館職員との交流の意義、後者では地域貢献の意識の高さと同世代の仲間作りの意義が明らかになった。さらに、北海道大学総合博物館において異世代メンバーからなるグループによる展示解説に関しても同様の調査を実施し、その結果からも活動の社会文化的な要素の重要性が再確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

人々にとって、博物館は展示物を通して知識や情報を得る場だけでなく、その資源を活かしてさまざまな人と出会い交流していく場でもあることを、明石市立天文科学館と昭和日常博物館、さらに北海道大学総合博物館での人々の博物館体験の長期記憶に関する実証研究によって明らかにした。本研究では特に高齢者にとっての異世代交流に注目して調査を展開したが、異世代交流だけでなく、年齢を問わない仲間や博物館職員との交流の意義や高齢者の同世代の仲間作りの意義が明らかになり、超高齢化社会となった日本において博物館が果たしうる積極的な役割が示唆された。

研究成果の概要(英文)：We conducted the research and surveys on long-term memories of museum experiences among the senior citizens engaged in Astronomy College for Seniors in AKASHI MUNICIPAL PLANETARIUM and the senior groups called Ikiiki-tai conducting the community-minded activities in various places including The Showa Era Life Style Museum after taking the course of group reminiscence in community conducted by Kitanoagoya city. In both cases, the significance of socio-cultural factors in museum experiences was identified. Furthermore, in the former case, the importance of interaction with other members in various ages and museum staffs is remarkable. In the latter case, the consciousness of community contribution and the importance of making company among senior members are also identified. We also conducted the same surveys among volunteer interpretation group consisting of members in various ages in The Hokkaido University Museum and identified the significance of socio-cultural factors.

研究分野：博物館教育学

キーワード：長期記憶 来館者研究 博物館評価 博物館学 認知心理学 高齢者 異世代交流

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

博物館評価に関する実践的な研究が求められるなか、湯浅（本研究代表者）は、主として自然史や理工系の資料を扱う科学館を対象として、「記憶の中の科学館」という研究テーマを掲げ、科学館の教育プログラムに参加した人々がその体験から受けた影響について長期的な視点から質的に評価しようと取り組んできた。日本ではまだ体系化されていない研究領域であり、画期的な研究事例として注目を集めた。一方、認知心理学者である清水（研究分担者）は博物館研究の第一人者として知られるカナダのプリティッシュ・コロンビア大学の David Anderson 教授と共同して、大阪万国博覧会及び愛知万国博覧会の来場者の長期記憶を調査して記憶の鮮明さに影響する諸要因を明らかにしてきた。

湯浅と清水は、平成 21～23 年度に、学際的共同研究「博物館体験に関する長期記憶研究に基づく新たな博物館評価の構築」（日本学術振興会科学研究費補助金（平成 21～23 年度基盤研究(C)21601002 代表者：湯浅万紀子））に取り組み、北海道大学総合博物館（北海道札幌市）の来館者と学生への質問紙調査と面接調査、全国科学博物館協会に登録されている科学館 234 館の職員への質問紙調査と面接調査、北海道大学総合博物館の思い出のエッセイ募集・分析を実施した。更に、調査対照群として、大学生と関西地域の高齢者に質問紙調査を実施した。その結果、調査協力者の長期記憶は、(1)認知的学習の側面と豊かな情動体験を伴った感情的側面を併せ持っていること、(2)その多面性が時を経て変容すること、(3)個人的な要因や時代背景からの影響を受けながらも、変容の過程で博物館体験に関与する人と人との関わりが博物館体験の意味づけに大きく影響すること、などを明らかにした。

その後、平成 24～26 年度に、湯浅と清水は学際的共同研究を発展させ、「地域社会での役割と関与者の長期記憶の観点に基づく博物館の新評価に関する研究」（日本学術振興会科学研究費補助金（平成 24～26 年度基盤研究(C)24501267 代表者：湯浅万紀子））に取り組んだ。50 年以上にわたってそれぞれの地域社会に根差した実践的文化活動を展開している名古屋市科学館（愛知県名古屋市）と明石市立天文科学館（兵庫県明石市）を調査対象とし、来館者に限らず、友の会会員、ボランティア、新旧職員といった両館の「関与者」に質問紙調査と面接調査を実施した。関与者は对人的要素を重視して個人的な体験を意味づける特徴が顕著であり、科学館は地域社会において知識の伝達の場としてだけでなく、関与者が人生を通してさまざまな形で関わり続けて、積極的な意味づけをなし得る場であることを明らかにした。

また、湯浅と清水は前述の D. Anderson 教授の研究分担者として、平成 24～26 年度にカナダ政府の人文社会科学評議会（Social Science Research and Humanities Council, SSRHC）の研究助成を受け、日本の社会文化系博物館を対象に「博物館体験と『懐かしさ』反応に基づく来館者の長期記憶に関する研究」に取り組んだ。来館者が展示物から想起する記憶の諸要素の解明を目指し、高齢者の評定反応に基づく量的分析と語りに注目した質的分析を実施した。

本研究はこれらの研究を更に発展させ、高齢者にとって博物館が果たし得る役割、高齢者と異世代との交流の意味に特に注目し、超高齢化社会となっている日本において博物館の新しいあり方を検討することを目指した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、研究代表者と研究分担者による博物館体験の長期記憶に関するこれまでの学際的共同研究の成果を十分に活用して、博物館という場で高齢者が異世代の人々との交流を通して互いに意味ある自律的活動を展開していくのに必要な諸条件を分析し、博物館が地域社会においてそうした新たな役割を構築するための指針と方法論を示すことにある。高齢者向けの講座を主催している明石市立天文科学館と、地域回想法に先進的に取り組む昭和日常博物館（愛知県北名古屋市）と協力し、両館の活動の意義を、高齢者の生活の質の向上、異世代間交流の活性化、地域の文化資源の再発見と継承など博物館学的観点から多角的に検証する。本研究は、超高齢化社会において博物館が積極的な役割を担うための新たな活動指針や具体的方法論を示す挑戦的な研究となる。

3. 研究の方法

平成 27 年度には、明石市立天文科学館のシルバー天文大学（高齢者向け天文サークル）と、昭和日常博物館での地域回想法の取り組みの現場で参与観察を行い、両館の研究協力者と共に関係者と相談を重ね、研究計画 2 年目以降に実施する調査をスムーズに進行できる方策を確定した。同時に、関連する他館の情報を収集した。平成 28～29 年度には、両館の研究協力者の協力を得て、取り組みに参加する高齢者らを対象に調査協力者を募集した。そして、本研究用に設計した記憶特性質問紙（MCQ: Memory Characteristics Questionnaire）を使用した質問紙調査及び半構造化面接調査を実施して、博物館にまつわる体験の諸要素の分析を進めた。倫理的配慮に関しては、北海道大学の倫理規定に則り、調査参加者に対して文書により内容を説明し、途中で自由に離脱できることを明記・保証した上で、調査参加者がその場で調査への参加協力に同意する旨の文書に署名して実施した。平成 30 年度には、北海道大学総合博物館で異世代交流を意図して構成した中学生と大学院生、50 代以上の市民から成る展示解説ボランティアグループでの展示解説を 5 回実施し、その取り組みの意味について前年度までと同様の質問紙調査・面接調査を実施して分析した。そして、前年度までの分析を更に進め、明石市立天

文科学館と昭和日常博物館で研究報告会を開催し、研究協力者や学芸員、当該取り組みの参加者と共に、研究結果とその意義について議論した。4年間の研究期間に、論文発表や学会発表、書籍の出版を通して、研究成果を広く公開した。

4. 研究成果

(1)平成27年度には、明石市立天文科学館のシルバー天文大学と、昭和日常博物館の地域回想法の現場で参与観察を行い、次年度以降に実施する調査で注目すべき各館での高齢者の関わりの特徴を抽出した。前者では、退職後の高齢者の余暇利用や知的好奇心を満足させる場として、地域にある博物館が豊富な資源を有していることを参加者が意識して活動に臨んでいることが示唆された。後者では、北名古屋市が全国でも先駆的に取り組んでいる地域回想法に高齢者自身が参加していることと、この取り組みを他地域に紹介する役割を高齢者自身も担っていることへの意識の高さが伺えた。そして、研究協力者と関係者ともに相談を重ね、研究計画2年目以降に実施する調査をスムーズに進行できる方策を検討した。

そして、日本版の記憶特性質問紙(MCQ)の質問項目を含む質問紙を本研究用に設計する準備を進めた。調査協力者の属性(性別、年齢)や当該活動の開始時期、来館回数、館での体験の内容、多種の博物館への来館頻度、当該館で最も印象に残っている出来事とそれを具体的に簡潔に記述する項目を設定した。そして、最も印象に残っている出来事の記憶について、鮮明、意味、感覚、時間、感情、前後の出来事に関する設問22項目のそれぞれに対してあてはまるものを一つ選び、1~7の番号のいずれかにをつけるよう求め、あまり深く考え込まずに答えることを強調することとした。記憶特性質問紙は、Johnson, Foley, Suengas, & Raye (1988)をもとに日本語版(Takahashi & Shimizu, 2006)が作成されており、清水・湯浅(2012)によって5因子が抽出されている。このうち、第1因子「鮮明」に関連した6項目(たとえば、「その出来事の記憶は、ぼんやりしている(1) - はっきりしている(7)」など)、第2因子「意味」に関連した6項目(たとえば、「あとになって考えてみると、この出来事が大きな意味をもつと、まったく思わなかった(1) - たしかに思った(7)」など)、第3因子「感覚」に関連した4項目(たとえば、「その出来事の記憶の中に音は、ほとんどない(1) - たくさんある(7)など」、第4因子「時間」に関連した1項目(「この出来事がいつ起こったかについては、あいまいである(1) - はっきりしている(7)」)、第5因子「感情」に関連した3項目(たとえば、「その記憶の全体の印象は、よくない(1) - よい(7)」など)の五つの因子に加えて、どの因子にも属さなかったが、有用と思われる「前後の出来事」に関連した2項目(「その出来事より前に起こった関係のある出来事を、ほとんど覚えていない(1) - はっきり覚えている(7)」と「この出来事より後に起こった関係のある出来事を、ほとんど覚えていない(1) - はっきり覚えている(7)」)を第6因子として用いた。

また、高齢者を対象にしたユニークな活動を行っている昭和のくらし博物館(東京都大田区)にヒアリングを実施した。更に、北海道博物館協会と日本博物館協会北海道支部が主催した北海道博物館大会において、研究代表者は「高齢社会のなかでミュージアムにできること」というテーマを設定した研究大会(北海道博物館、2015年7月10日)をコーディネートし、昭和日常博物館、知内町郷土資料館(北海道上磯郡)およびひろ動物園(北海道帯広市)、北海道博物館(北海道札幌市)、北海道医療大学(北海道石狩郡)での実践事例報告を受けて、総合討論を行い、今後の調査を進める上での考察を深めた。動物園を含めた博物館が、資料や標本、動物、博物館スタッフ、博物館という空間、そして地域資源を活かして超高齢化社会で果たする役割について幅広く研究する必要性を確認した。

(2)平成28年度には、明石市立天文科学館では、高齢者を対象に実施しているシルバー天文大学の受講生を対象に、調査協力を呼びかけ、11名に質問紙調査と面接調査を実施した。11名の属性は、男性7名、女性4名、70代6名、60代5名である。シルバー天文大学の受講生のなかには、天文大学を受講することで知的好奇心を満たして生活を充実したものとしている方もいれば、加えて同館でボランティアとして活躍し、異世代の来館者そして異世代だけでなく同世代のボランティアメンバーと交流することを意味づける方がいた。調査分析結果の詳細は、次年度に追加して実施した調査と併せて、(4)項で後述する。

北名古屋市での地域回想法を経験した高齢者は、回想法受講後に、受講時に結成された「いきいき隊」グループで談話したり、グループの枠を超えた「いきいき隊」全体として地域の幼稚園や保育園、小学校など多様な場で昔の遊びを伝える活動を展開し、異世代間交流を継続して行っている。「いきいき隊」の昭和日常博物館での実践を参与観察し、高齢者に活動内容について聞き取りを行った。その後、8名に質問紙調査と面接調査を実施した。8名の属性は、男性5名、女性3名、80代1名、70代7名である。MCQについては、統計的分析を行って明石市立天文科学館との調査との比較も試みたが、いずれも件数が少なく考察の適切な対象になり得ないため、報告は省略する。一方、面接調査では記憶に残っている出来事について、その根拠を確認しながら詳細に聞き取ることができた。その結果は次の通りである。

語られた印象的なエピソードは、年次を特定しないものも含め、全ていきいき隊として活動した10年前以内のことであり、博物館の場に限らずにいきいき隊として子どもに昔の遊びを伝えた体験と、地域回想法といきいき隊の活動についてテレビや他地域からの視察団の取材に応じたことであった。いきいき隊の活動に取り組む目的は自身の健康維持だけでなく、地域に貢

献することであるとの意識が高い方も多く、メンバー間での交流も盛んである。

語られた内容をテーマに分類して分析した結果、異世代交流については「孫がいないから、子ども達とのやりとりが楽しい」(70代男性)、「小さな子と触れ合うと、逆にパワーをもらって嬉しい。・・・教えた昔遊びが最初はできなかった子どもが、できるようになった時の得意そうな顔に、こちらまで嬉しい」(70代女性)という子どもとの交流を意味づける発言の他に、子どもだけでなくその親も対象にした活動において若い親が子どもに接する際の配慮を目の当たりにして、スキンシップが少なく厳しく叱ることが多かった自身の子育てを振り返って反省する70代女性・男性の発言もあった。

しかし、面接調査で語られたことは、異世代交流に関する意味づけよりも、同世代であるいきいき隊のメンバーとの交流や、メンバーへの尊敬や信頼のほうが目立ち、意味づけが強かった。たとえば、「仲間がよい人ばかりで、ご縁だった」(70代女性)、「(いきいき隊のグループ枠を超えた活動を企画する)役員は、人のために奉仕していて、ここまでできるのかと最初は驚いた。すばらしい。感謝している」(70代女性)と語られた。そのリーダーを務める人々は、「人のために役立ちたい。(いきいき隊の)皆が楽しんでやれるような場をどんどん広げていきたい」(70代男性)などと語った。いきいき隊の活動は義務でなく、条件が合う時に参加するという仕組みである。このような体制であるからこそ継続できると、活動を意義づける発言もあった。そして、退職後、職場の人間関係を離れて、地域社会での生活が日常の大部分を占めることになった70代男性は、地域回想法を通じて知り合った仲間は古くからの知り合いのような近さを感じ、いきいき隊は「新しく幼なじみを作れる場」であると意味づけた。但し、付き合いの距離を保つことには留意しているとも語った。

調査協力者8名はいずれも、地域回想法に取り組む北名古屋市に在住していることを意識して感謝し、この取り組みを広報したり、今後もいきいき隊の活動に関与していく意向を示した。

(3)平成29年度には、明石市立天文科学館において、シルバー天文大学の受講生に限らず、同館の友の会とボランティアにも調査協力を呼びかけ、同館での数年から数十年前の記憶を語っていただける40才以上の方々へと調査対象を広げて協力者を募った。その結果、5名に協力いただき、質問紙調査と面接調査を実施した。5名の属性は、男性3名、女性2名、50代1名、40代4名である。一方、北名古屋市の「いきいき隊」の昭和日常博物館での実践は行われなかったため、追加調査は実施しなかった。

明石市立天文科学館で平成28・29年度に実施した調査について、前述した理由によりMCQの分析結果は省略し、面接調査について結果を報告する。調査協力者16名が語った最も印象に残っているエピソードは、10年前までの出来事が9名、11年から20年前までが1名、21年から30年前までが3名、31年前から40年前までが2名、年代を特定しない方が1名であった。最も印象に残っているのは、夏の観望会や夜間観望会、シルバー天文大学や女性対象の天文講座「宙(そら)ガール」、講演会など、イベントや講座に関連した内容の他に、阪神淡路大震災被災時に止まった科学館のシンボルでもある塔の時計についてであった。語られた場面で意味づけられたのは、人々との交流の要素が目立ち、以下に発言の一部を紹介する。

異世代交流については、連続した講義や実習を受講してプラネタリウムでの発表、修了式が実施される女性限定の「宙ガール」を受講した70代の女性は、「さまざまな年代の人と交流し、大人同士の感覚で付き合えることが本当に素敵だった」、「修了式は館スタッフが配慮して下さり、受講一期生も招かれて、一緒になれたのが嬉しかった」と語った。60代女性も、10代のメンバーとも交流した宙ガールの取り組みや、同窓会のような修了式の意味づけ、このような場面を設定した館スタッフへの感謝を語った。友の会については、「20数年前の夏の観望会が最も印象的・・・一人での活動が多かったが、初めて星の好きな人たちと団体で旅行した」(40代男性)、「(友の会のグループとして発足した)天体写真クラブの活動も楽しい。年代はさまざまで、教え合ったり、有志で撮影に行く」(40代男性)という発言や、10年以上前に参加した1泊の観望会で知り合った友の会の仲間とは現在も交流が続いているとする50代男性がいた。また、「友の会の観望会で一緒に部屋になったり、タクシーと一緒に乗ったり、食事をして行ったり・・・ここはね、すばらしいのです。ものすごくアットホームなのです。カメラ購入のアドバイスなど・・・一つの家族みたいなのです・・・いろいろな地域から参加されて、ここが一つの仲間なのです」(70代女性)と友の会を意味づける発言があった。また、ボランティアとしてさまざまな年代の来館者に展示解説する協力者もあり、「普段は若い人と話す機会はないが、ボランティア同士で共通の話題があるので、あまり年齢を気にせず、話す。スタッフの方々がボランティアを大事にしてくれていて、居心地がよい・・・新しくボランティアに入る方を今のように温かく迎えたい」(70代女性)と異世代のボランティア同士の交流を意義づけたり、科学館スタッフへの感謝を述べた。科学館での活動全般については、「宙ガール、シルバー天文大学、ボランティア・・・科学館でいろいろな年代の方、たくさんの方に出会えて嬉しい」(70代女性)、「(体調を崩していたが回復後、科学館でさまざまな活動に参加し)自分のやりたことをやっているといいのだと思った。一つのことをやり出すと、次々にやりたいことがきて、いろいろなことに興味をもって立ち向かい、やれるようになった。人生が開けた、友達もものすごく増えるし、人生が全く違うものになった」(70代女性)と、年代を問わず人との交流を意味づける発言が目立ち、以下に発言の一部を紹介する。

また、前述した科学館職員の配慮に感謝していることについて言及した70代女性2名の他に

も、20年以上前の当時の館長や副館長と出会うその人間的魅力から科学館と関わるようになったことに特別に言及した40代男性・50代男性の発言もあった。

昭和日常博物館の調査協力者達が北名古屋市の取り組みに関与していることへの意識を語ったように、明石市立天文科学館の調査でも科学館が明石市の市立であることや自身が明石市民であることについて語った協力者が多かった。たとえば、明石市に在住していても勤務先が別地域にあり、「最近やっと退職後に、科学館に通うようになり、ちょっと明石市民になったかな・・・恵まれている。明石でよかったなあと思う」(70代女性)、更に「科学館・・・人間の人生を変えるほどの力がありますよね・・・やっぱりそれだけ明石の街にとってシンボリックなものなのでしょうね。長い間、意識のなかにあります」(40代男性)という発言がなされた。

(4)平成30年度は、北海道大学総合博物館で、異世代交流を意図して構成した中学生と大学院生、50代以上の市民から成る同館の展示解説ボランティアグループで、来館者を対象に展示解説を5回実施した。解説に先立ち、シナリオを作成し、当該分野の専門研究者の監修を受けて改訂し、展示室でリハーサルを行って話し方や立ち居振る舞いがチェックされた。毎回、4～6名のメンバーが展示室で一人ずつ20分の解説と質疑応答し、解説者以外のメンバーは来館者の誘導や解説後の感想を聞くなど運営に協力し、全員の解説終了後には当日の解説について意見交換する振り返りの時間を設定した。新たな展示解説に取り組む際には、メンバー内で公開リハーサルを実施し、メンバーからアドバイスを受ける機会を設定した。5回の解説終了後、この取り組みの意味について、中学生1名(男性)、20代の大学院生2名(男性・女性)、60代の市民2名(男性・女性)、70代の市民1名(男性)に、明石市立天文科学館と昭和日常博物館で実施したのと同様の質問紙調査・面接調査を実施し、分析した。そこでは、準備を重ねて展示解説を実施して来館者から好評を得たことについての自己効力感の高まりが語られただけでなく、「大学院生や中学生から展示解説で不十分であった点を指摘されたが、それが無礼ではなく適切だった。解説を見直す決心がこれで固まったように思い、ありがたかった」(70代男性)、「解説後の振り返り会において、さまざまな年代のメンバーと率直な意見交換できるのが大事だと思っている」(60代女性)という発言から、グループ活動における異世代交流について重視する意味づけがなされた。

前年度までの分析を更に進め、明石市立天文科学館と昭和日常博物館において研究報告会を開催し、館職員からは、定量的な調査では明らかにならない、人々の体験の意味を明らかにした本研究の意義が評価された。明石市立天文科学館の報告会では、参加したボランティアから、自身の体験の意味づけが研究によって明示されて納得できたことが指摘された。

(5)本研究では特に高齢者にとっての異世代交流に注目して調査を展開したが、異世代交流だけでなく、年齢を問わない仲間や博物館職員との交流の意義や高齢者の同世代の仲間作りの意義が明らかになり、超高齢化社会となった日本において博物館が果たしうる積極的な役割が示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

湯浅万紀子・清水寛之・藤田良治、科学館の関与者の長期記憶に関する調査研究～名古屋市科学館での面接調査を中心に～、日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要、査読有、22、2018、pp.47-54

清水寛之・湯浅万紀子、記憶特性質問紙(MCQ)による科学館体験の自伝的記憶に関する検討——科学館職員、大学生、および高齢者における小学生の頃の科学館への好意度の分析——、神戸学院大学人文学部紀要、査読無、36、2016、pp.167-182

湯浅万紀子、博物館体験の記憶の研究、北海道大学総合博物館ニュース、査読無、33、2016、p.6

〔学会発表〕(計4件)

湯浅万紀子・清水寛之・藤田良治、博物館体験の長期記憶に関する研究(明石市立天文科学館編)2018「博物館体験の長期記憶に関する研究」報告会(明石市立天文科学館)2019年3月10日、明石市立天文科学館(兵庫県明石市)

湯浅万紀子・清水寛之・藤田良治、博物館体験の長期記憶に関する研究(昭和日常博物館編)2018「博物館体験の長期記憶に関する研究」報告会(昭和日常博物館)2019年3月9日、昭和日常博物館(愛知県北名古屋市)

湯浅万紀子、博物館体験の長期記憶を探る—来館者調査の意義と課題(招待講演)第23回日本平和博物館会議研修会、2016年11月11日、立命館大学国際平和ミュージアム(京都府京都市)

湯浅万紀子、記憶の中の科学館～50年前から紡がれる科学館体験～、北海道大学総合博物館土曜市民セミナー・道民カレッジ連携講座、2016年3月19日、北海道大学(北海道札幌市)

〔図書〕(計1件)

湯浅 万紀子・Anderson, David・平井 康之・藤田 良治、樹村房、ミュージアム・コミュニケーションと教育活動、2018、pp.11-52、pp.174-207

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：清水 寛之

ローマ字氏名：SHIMIZU, Hiroyuki

所属研究機関名：神戸学院大学

部局名：心理学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：30202112

研究分担者氏名：藤田 良治

ローマ字氏名：FUJITA, Yoshiharu

所属研究機関名：愛知淑徳大学

部局名：創造表現学部

職名：准教授

研究者番号(8桁)：40515102

(2)研究協力者

研究協力者氏名：市橋 芳則

ローマ字氏名：ICHIHASHI, Yoshinori

研究協力者氏名：井上 毅

ローマ字氏名：INOUE, Takeshi

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。